

第15回 夏期福音特別集会(2)(鹿沢)

新次元の人

――エペソ書第2章――

1968年8月24日

小池辰雄

従順 キリストと共に活かす 天一自在 天国人 恵信一如 神の御意を生きる 二つのものが一つに 第三の次元 あなたがいなくては生きていけません 律法は隠れたる福音 新次元の人 本当の勝利 「一」 神の家族 新人類 直結のキリスト者 一即多・多即一 聖霊の人に成長

【エペソ2】

1 汝ら前には咎と罪とによりて死にたる者にして、² この世の習慣に従い、空中の権を執る宰、すなわち不従順の子らの中に今なお働く霊の宰にしたがいて歩めり。³ 我等もみな前には彼らの中におり、肉の慾に従いて日をおくり肉と心との欲する随をなし、他の者のごとく生れながらの怒の子なりき。⁴ されど神は憐憫に富み給うが故に我らを愛する大なる愛をもて、⁵ 咎によりて死にたる我等をすらキリスト・イエスに由りてキリストと共に活かし(汝らの救われしは恩恵によれり)⁶ 共に甦えらせ、共に天の処に坐せしめ給えり。⁷ これキリスト・イエスに由りて我らに施したもう仁慈をもて、其の恩恵の極めて大なる富を、来らんとする後の世々に顕さんとてなり。⁸ 汝らは恩恵により、信仰によりて救われたり、はおのれに由るにあらず、神の賜物なり。⁹ 行為に由るにあらず、これ誇る者のなからん為なり。¹⁰ 我らは神に造られたる者にして、神の預じめ備え給いし善き業に歩むべく、キリスト・イエスの中に造られたるなり。¹¹ されば記憶せよ、肉によりては異邦人にして、手にて肉に行いたるかの割礼ありと称うる者に無割礼と称えらるる汝ら、¹² 曩にはキリストなく、イスラエルの民籍に遠く、約束に属する諸般の契約に与りなく、世に在りて希望なく、神なき者なりき。¹³ されど前に遠かりし汝ら今キリスト・イエスに在りて、キリストの血によりて近づぐことを得たり。¹⁴ ¹⁵ 彼は我らの平和にして、己が肉により、様々の誠命の規より成る律法を廃して、二つのものを一つとなし、これは二つのものを己に於て一つの新しき人に造りて平和をなし、¹⁶ 十字架によりて怨を滅ぼし、また之によりて二つのものを一つの体となして神と和がしめん為なり。¹⁷ かつ来りて、遠かりし汝等に



も平和を宣^のべ、近きものにも平和を宣べ給えり。18 ぞはキリストによりて我ら二つのもの一つ御霊にありて父に近づくことを得たればなり。19 されば汝等^{やどりびと}はもはや旅人また寄寓人^{やどりびと}にあらず、聖徒と同じ国人^{くにびと}また神の家族なり。20 汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・イエス自らその隅^{すみ}の首石^{おやし}たり。21 おのおのの建造物^{たてもの}、かれに在りて建て合せられ、いや増しに聖なる宮、主のうちに成るなり。22 汝等もキリストに在りて共に建てられ、御霊によりて神の御住^{みすまい}となるなり。

●従順

何事も本当の自主性を持たなくてはいかん。環境に支配されずに。自由なんですよね。御霊の世界というものは、物の世界を自由に支配する。パウロが、

「有れども無きがごとく、無けれども有るがごとく」

と、コリント後書6章で言っている。

そういうことで、足が痛ければ、足を出していてよろしい。ただし、それは魂の姿勢が端座していなくては。讃美歌を持つてこなければ、私は聞いている。しかし、心の中では本当に皆さんと一緒に歌っていると、こういうわけです。これが律法を越えた世界なんです。律法を超えながら、一番深い意味においては律法を満たしている。

では、エペソ書2章に行きましょう。

1 汝^{きみ}ら前^{まへ}には咎^{とが}と罪^{つみ}によりて死^しにたる者にして、

「汝ら」と語りかけているのは異邦人です。

2 この世の習慣^{なわわし}に従い、空中の権^とを執^{つかさ}る宰^さ、すなわち不従順の子らの中に今なお働く霊の宰にしたがいて歩めり。

「今なお働く霊」とは、空中を司る悪霊のことです。あらぬ霊のことです、キリストにあらざるところの、キリストの霊に逆らうところの霊。キリストの霊に逆らう最高の霊はサタンである。彼は神に不従順であつた。「人間の最初の不従順」と、ミルトンが『パラダイス・ロスト』(楽園喪失)の一番先に歌っている。この人間の不従順は、もとはサタンがやつた。それを人間が受け継いだ。だから、「不従順の子ら」とパウロもここで書いています。「不従順の子ら」ということは、サタンの子ら、キリストを受けざる者たちのことです。

今の若い人は非常にこの従順ということが嫌いらしい。なかなか「はい」と言わない。「でも」なんて言つて、デモ行進ばかり。さつき私が自主性と言うのと決して矛盾しない。これはマルチン・ルターが『クリスチャンの自由』の一番先に、

「キリスト者は万人に自主なるものである」

「キリスト者は万人の奴隷である」

と、この二つの全く背反したことを命題にした。これはパウロの言葉から引っぱってきた。



本当の自主なるものは、本当の奴隷でなくてはならない。何の奴隷か。人間の奴隷ではない。神さまの奴隷です。パウロが、

「私はキリストの奴隷となりました。われはキリストの僕」

という。キリストは、

「われは神の僕」

と言った。畏るべきものに対して本当に平伏すひとは、そういうひとだけが自主を持つんです。今の一般の自主なんて決して自主ではない。

この不従順というのは、そういう間違った自主なんていうのは、これはみんな「不従順の子ら」です。そういう霊の手下になっていて、これがわからない。今は世界はおおかたそういった手下になってしまった。

3 我等もみな前には彼らの中うちにおり、肉の慾に従いて日をおくり肉と心との欲する随ままをなし、他の者のごとく生れながらの怒の子なりき。

生れながら怒りつぽいというのではなくて、神の「怒りの子」ということは、神の怒りの対象であつたということ。パウロさんも自分でそれを知らなかった。

そういう、いわゆる勝手気ままな自由は、実は「不従順の子ら」である。

●キリストと共に活かす

4 されど神は憐憫あわれみに富み給うが故に我らを愛する大なる愛おおいをもて、

神の大慈大悲、大愛というものは、人間の側のどんな事態も、「これはいかん」と言つて切つてしまわない。神の憐れみというのはどん底の憐れみです。これ以上の憐れみはないという憐れみ。ここにも「富み」という字が書いてある。豊かな憐れみの故に我らを愛する大慈大愛をもつてと。

5 咎とがによりて死にたる

罪というのは死を持つから。

我等をすらキリスト・イエスに由りてキリストと共に活かし

「共に活かし」とは、活力を新しく与えるという字です。

(汝らの救われしは恩恵めぐみによれり)

そういう恵み。愛と言おうが、恵みと言おうが、同じです。

6 共に甦よみがええらせ、共に天の処ところに坐せしめ給えり。

とまあ、素晴らしいことが書いてある。

「霊のもろもろの祝福をもて天の処ところにて我らを祝し」

と1章3節にあつたでしょ。今度も、

「共に天の処に坐せしめ給えり」

と。これはコロサイ書3章を読みますと――エペソ書とコロサイ書は姉妹編ですから――



「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼処^{かしこ}に在りて神の右に坐し給うなり。²汝ら上にあるものを念^{おも}い、地に在るものを念うな、³汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。

汝らの生命は神の懷の中に入っているよと、キリストと一緒に。

⁴我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」(コロサイ3:1-4)

と。これはもう向う側のはなしですよ、「共に甦えらせ」と。キリストと共に復活させられてしまつて、

「われキリストと共に十字架されたり。もはや生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生くるなり」

とパウロが言った。それは正に、「共に天の処に坐せしめ」られる。我々は地界にありながら、天界にある。

●天一自在

頼山陽の句に、

「雲か山か呉か越か 水天髣髴^{ほうふつ}として青一髪」

というのがある。天草の洋の有名な句です。天か地かと。水天髣髴としてわからない。どこまでが海なのか、どこから空なのかわからない。一如になっている。

パウロの現実というのとははや天地一如の現実であります。そういうところに来ないと、このエペソ、ピリピ、コロサイなんていうものは読めない。

「身を捨つる身はなきものと思う身は天一自在^{てんいつざい}だがいもなし」

と。これは木喰上人の歌です。こういう先輩がいたことを我々はうつかり忘れていた。もつと日本のものを読まなくてはいかん。日本の秀でた霊感的なものを。「身を捨つる身はなきものと思う身は」と。もう身を捨てようにも捨てられない。どこに自分の身があるかねと。捨てようと思つても、捨てる身がない。

あの無門関の中のみそすり小僧がそういう境地にいた。禅宗の第五祖が、第六祖になるみそすり小僧に衣鉢を与えた有名な話がある。一生懸命で自分の中を清めようとするような歌を第一の弟子の先輩が作ったところが――鏡を一生懸命に清めるように自分の身を清めようというような歌を作ったところが――清めるにも、清めるものも一体何もないんだと、このみそすり小僧が言った。塵を払うにも、塵を払うものがないんだと。そういった無の境地。

「身を捨つる身はなきもの」と。一生懸命で、「自我に死になさい」というが、いったい自我というのはどこにあるのでしょうかというようなわけだな。「身を捨つる身はなきもの



思う身は天一自在うたがいもなし」と。もう天と一つの自在な姿であつて、何を疑うにも、こればかりは疑えないという。本当にこれは無の境地に入ったところの、木喰和尚の天一自在という境地です。

イエス・キリストがその最たるものである。まあ有無もないです、イエスは。空々漠々たるもの。しかしながら、ひとつ在る。何かというと、「父」という、彼にとっては在るものはただ「父」だけだ。これに対してはもの凄い意識を持つている。これは一番根源のもの。「聖霊の人」というのは、これは根源意識がもう御霊を離れてはありえないひとを「聖霊の人」といふんです。その人の根源意識というものが、この御霊を離れてはありえない。御霊を離れてはありえないというこの根源意識は実は、自意識から抜けた意識なんです。まだ自我なんていうものを問題にしているうちはダメです。

「それではもう先生は全然自我のない人か」
と。決して然らず。

「有つても、そんなものは問題にならないというところに来ているか」
だけののはなし。そんなものをいつまでも問題にして、百年たつても二百年たつても、私はどうにもならん。そういう、あるがままのガラクタを捨てて、どつしりと尻餅ついているようなもの。それが、抜けているということなんです。しょうがないね、これ。

「身を捨つる身はなきものと思う身は天一自在うたがいもなし」
と。キリストがもしこれを読んだら、「そうだ、凄い野郎が東洋にもいたな」と言つて、キリストは喜ぶだろう。

●天国人

パウロはこの天地一如の世界に入ってしまったっているから、

「共に甦えらせられ」

という。あの驚くべきキリスト、今もなお、主は万象に貫在し、貫き在るところのもの凄い生命力を持つておられる。

「風よ、静まれ」

たとえば、風は静まったというひとです。

「無花果よ、枯れよ」

たとえば、無花果が枯れてしまっている。腐りかかった死人に

「甦れ、出てきたれ」

たとえば、ラザロは出てきた。そういう人です。福音書のキリストにでつくわして、たまらなくなつてしまつて、

「もうキリストだ。このキリストのほかには何が必要か」

と。キリストと比べるものがありますか、皆さん。有るなら言つてくださいよ。このキリ



ストが、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

と言われた。何だかわけがわからないですね。しかし、

「幸いなるかな、霊の貧しい者」

とは、そのように、小さな自意識なんでものから抜けたもの、小さな自主なんでものを抜けたもの――私の言葉はまるで矛盾しているようだが、そうなんですよ――そういうようなところに入る。完全に神のとりこ、キリストのとりこになると、自由になるから。「風吹かば吹け」というようなことです。

どうか、青年諸君よ、立ち上がれと。今日は、この新次元の人に君たち青年諸君がならないなら、この本当の覚悟ならざる覚悟をもつてこの山を降りていくのでなかったら、もう来年からこの集会は私は開かない。夏の特別集会はもう今回で終りだ。それだけの、もう本当にギリギリのところ皆さんを今、置いている。この中から一人の本当のパウロが、ルター以上のルターが出てくれなくては。ジャンヌ・ダルク以上のジャンヌ・ダルクが出てくれなくては。あなた方において、私はそのことを期待し、またそれを信じます。私たちに、この小さき群れにそれだけの絶対的な、あるひとつの使命がかかっている。もはや「教会の、無教会の」と、そんな話ではない。

これが、

「共に甦らせられ、共に天の処にどっかりと坐らせてくださった。私たちは天国人である」

とパウロは言う。

「天国は何処にあるか。お前たちの中にあるじゃないか」

とキリストが言われた。

●恵信一如

7 これキリスト・イエスに由りて我らに施したもう仁慈^{なさけ}をもて、其の恩恵の極めて大なる富を、

ここにも「富」という字がある。そのほかにも出ている。もう広大無辺なる豊富なる豊かな恵み、恵みの極み。

来^{きた}らんとする後の世々に顕^{あらわ}さんとてなり。8 汝らは恩恵により、信仰により

て救われたり、

この8節は忘れないように。恵^み、信^ふ、ということ。「信仰、信仰」と、私はさんざん聞かされたが、「恵み」ということを本当の意味において聞かされなかった。ここも恵^み、信^ふ、一如である。恵みが先行する。キリストの恵みなくして何の信仰か。「信仰」の「仰^う」の字なんかいらん。「信」でたくさんです。仰いではばかりではしょうがないんだ。中に入らなくては。もはや天は



地にきたっている。詩篇85篇に、

「天と地とは接吻した」

と書いてある。

「¹⁰あわれみと真実とともにあい、義と平和とたがいに接吻せり。¹¹まことは

地よりはえ、義は天よりみおろせり」(詩篇85・10、11)

とある。そういうように、水天髣髴、天地一如の事態に、「天は地なり、地は天なり」という事態にきてしまう。

キリストという恵みそのものによつて、私たちはそれを受けとることによつて救われたというはなしですよ、「信仰により」というのは。

「キリストという恵みを受けとったら救われました」

というはなしです。何も難しくはない。

この世のいかなるものが、私たちの誰を、本当にただ一人の人を救うことができるか。万人は実は救いを要している。みんな救いを要しないような顔しているけれども。

「信仰? いや、そんなものは要らん。宗教? いや、そんなものは要らん」

なんて。だけれども、みんな実は根本的に失われた存在である。失われた存在であるということは実は、

「万人はこれ宗教人である」

ということなんです。日本人は――何と言いますか、全くしようがないね――その自覚をどうぞ持たなくては。

皆さん一人ひとりが大事な伝道者ですよ。皆さん、どうぞ隣人に、「そういうことではないんだ」と時々、本当に膝を交えて一対一で語ってやりなさいよ、自分の中に溢れるものを。理屈を語るのではない。議論ではないから。そうしたらば、

「何かしらんが、お前の中にはちよつと違うものがあるな」

と、感じさせるよ。人間の魂は本ものには何かを感じるはずですよ。

これが、「恵みにより」ということ。「恵みにより、信仰により」ということは同じ一つのことをパウロがはつきり言ったわけですよ。

キリスト自身が本願体ですからね。キリスト自身の本願体を受けとったら、私も本願的なものになってきましたと。こちらは悲願だったのが、本願悲願これ一如の世界に入っていく。これが、

「汝の御意を成させたまえ」

ということ。

はおのれに由るにあらず、神の賜物なり。^{たまもの}

もうこのように圧倒されたのは、自分の側の願いどころのさわぎではなかった。とんでもないものにぶつかったと。



私はそうですよね。中学校時代に、

「なにはさておき、宗教はごめんだ」

と思った。ところが、私の兄貴が内村鑑三先生の集会に行きだしてから、ちがってしまった。なにか違った。あの頃は、小石川同心町の家の二階に机を並べて、私が中学校の生徒で向うが大学生か。今でもまざまざと40、50年前のことが浮かんできます。本当に昨日のように、毎日、聖書は机の上に開かれてあつて、半年で創世記から黙示録まで読んでました。そして、午後9時になると必ず二階の手すりに寄り掛かって祈ってました。だけれども、兄は私に決して何も勧めない。その無言の実存そのものがあとで私を動かした。兄が天界に行つてから。私の第一の恩人はなんといつても小池政美なんです。

● 神の御意を生きる

⁹ 行為に由るにあらず、これ誇る者のなからん為なり。

「行為」とパウロが言つたのは旧約的な意味の行為であつて、キリストは、

「神の御意を行なうものでなければ天国に入れない」

というのは、

「神の御意を生きるものでなければ」

ということですよ、あの「行なう」というのは。そう訳した方がいらいくだ。御意を生きるものでなければ、天国に入れない。外側からいくら行なつたつて、それはダメです、いわゆる律法的行為であつたら。

¹⁰ 我らは神に造られたる者にして、神の預じめ備え給いし善き業に歩むべく、

キリスト・イエスの中に造られたるなり。

キリスト・イエスの中で改良、新造された。

¹¹ されば記憶せよ、肉によりては異邦人にして、手にて肉に行いたるかの割

礼ありと称うる者に

「手にて肉に行いたるかの割礼ありと称うる者」というのはユダヤ人だよな。伝統的に八目に割礼を受ける。肉の割礼です。

無割礼と称えらるる汝ら、

お前たちは無割礼、無信仰なんて言われるわけだ。

¹² 曩にはキリストなく、イスラエルの民籍に遠く、約束に属する諸般の契約

に与りなく、世に在りて希望なく、神なき者なりき。

全く普通の我々の、日本の一般の人たちと同じことを、ここにパウロが言っているわけです。

ローマ書2章の終りの方に割礼のことが書いてある。²⁸節、

「²⁸それ表面のユダヤ人はユダヤ人たるにあらず、肉に在る表面の割礼は割礼たるにあらず。²⁹隠なるユダヤ人はユダヤ人なり、儀文によらず、霊による



心の割礼は割礼なり、その誉は人よりにあらず、神より来るなり。」(ロマ2:28-29)

「隠なるユダヤ人はユダヤ人なり」というのは、本当に内から改造されたユダヤ人はユダヤ人ということ、そのユダヤ人はもはや単なるユダヤ人のことを言っているのではない。

「儀文によらず、霊による心の割礼は割礼なり」

と。はい、これです。彼らユダヤたちは、律法、割礼を受けていて、これは選民には相違ない。けれども、それにいわゆるあぐらをかいてしまって、どうにもならん。ところが、異邦人はそうじゃないから、ダメなんだ。律法を持たない、割礼も受けてないからと言って、ユダヤ人はこの律法と割礼を大いに誇っているけれども、そんなものは心配いらんよと、パウロが言おうとしている。

●二つのものが一つに

13 されど前に遠かりし汝ら

神の律法から遠く、律法も知らずに、割礼も受けない、その「前に遠かりし汝ら」は、今キリスト・イエスに在りて、キリストの血によりて近づくことを得たり。

かえって彼らよりもお前さんたちの方が神さまに近くなってしまったんだよと。「血の贖い」によつて。この「血」というのは、ユダヤの宗教がもともと血の宗教ですから。

「血は生命のあるところ」

という。疵なき羊の贖いによつて、贖罪の儀式をやっていたわけですから。それがイエス・キリストという本当に人間の罪を背負うことのできたただ一人の血によつてと。

14 彼は我らの平和にして、己が肉により、様々の誠命の規より成る律法を廃して、

モーセの十誡以外にいろいろな戒律がある。そんなものは全部キリストは排した。キリストはいわゆる律法を破ってしまった。けれども、いわゆる律法を破りながら、本当の律法を律法以上に満たした。だから、

「律法をこぼしたためにあらず、全うせんために我は来れり」

とキリストが言われたんですね。

二つのものを一つとなし、

ユダヤ人は選民で律法を持っているが、異邦人は、ギリシア人は律法を持たない。律法を持つものと律法を持たないもの、割礼のあるものと割礼のなきものとを、キリストは一つにしてみました。

怨なる隔の中籬を毀ち給えり。

たとえばイスラエルの神殿でも、異邦人が入る所と選民のユダヤ人が入る所とを分けてしまつてある。そんな中垣を取つてしまった。そういう具体的などころからきている言葉です。



これは二つのものを己に於て一つの新しき人に造りて平和をなし、はい、私が今日ここに「新次元の人」と書いたゆえんのはこの句に発するんです。「新人」でもいい。この「一つの新しき人」ということ。

16 十字架によりて怨を滅^{うらみ}ぼし、また之によりて二つのものを一つの体となして神と和^{やわら}がしめん為なり。

と。本来のそういった血筋のユダヤ人、それに対してギリシア人。この二つのものが一つになる。ユダヤ人をユダヤ人として、それ自体はちつともよくはない。ギリシア人も、ギリシア人としてそれ自体ひとつもよくはない。ユダヤだギリシアだといって、いくらこれが争ったってダメなんです。

今は、やれソ連だアメリカだなんて、西と東でもって争う。東と西。それから、ブルジョア階級とプロレタリア。大学でいうと、大学当局と学生だとか。みんないろんな対立がある。自民党と社会党だとか。もう世の中は対立だらけ。歳取った人と若い人の話が合わないだとか。いろいろちがう。今は対立の世界だな、いろいろな世の中を見ていると。そして、「平和、平和」と言って騒いでいる。二言目には「平和運動」とかね。耳にたこができる。

パウロさんがちゃんとここで言っている。

「二つのものが一つになる」

と。二つのものがどうして一つになるんでしょうか、というはなしだ。

● 第三の次元

ギリシア人は要するに人本主義です、大きく言いますと。人本主義的な自主性というやつ。その流れはずつと現代まで来てます。ユダヤ人は、確かにこれは神の選びの民に相違ない。啓示を受けた民です。けれども今度は、宗教の事態を、信仰の事態を私しているわけです。どんなにそれが立派であつても、それを「パリサイ」という。ユダヤ精神の代表的なものはパリサイ主義なんです。そのチャンピオンが誰あろう、パウロであつた。彼がユダヤ精神のチャンピオンの代表者であつた。パウロはサウロといっていたときに、非常に熱心なんです。神^{おきて}に対する熱心は、誰かこれに及ばんという人だつた。そして、

「律法^{おきて}の義につきては責むべきところなし」

と、彼自身がそう言っている。そのパウロの後輩に、パウロ精神、サウロ精神を今のユダヤ人もあいかわらず持っている。彼らはキリストよりもモーセだよ。モーセが大事なんだ、彼らは。律法なんだ。律法はいつたいモーセのものですか。本当は神のものです。

「律法^{おきて}は聖なるものにして」

とパウロが言った。その場合の律法^{おきて}というのはいわゆる律法としての律法ではない。厳として世の末まで神の律法は、靈法は貫いている。キリストもその律法を全うした人であります。



けれども、その律法を私して、「我こそは」とやっている——もうひとつ別な言葉でいうと、これはイズムに凝ったやつ——イズム的人間なんです。イズム的人間はこっちにもいる。そういうように、神のことも人間の方に切り換えられてしまつて、これは人間の方のことで、神さまの方はない世界。これはどっちもダメなんです。どうしても、こつちのものをパウロフヘーベンする、これを本当に廃してここから次元のちがったところの——第三の次元といいますが、第三の平面といいますが——そのところに来なければ、これを両方とも本当に活かすことができない。

アメリカの享樂主義、ソ連の唯物主義なんてなもの——なにもただアメリカを享樂とはいいませんけれども——要するに、どちらにもそれぞれのもちろん善さがあります。けれども、そいつを正しく活かすためには、もうひとつ次元のちがったところからこれを自由に駆使していくところの人にならないことにはダメなんだ。ただ否定するのではない。これをお互いに否定しあつていたらどうにもならない。ギリシヤとユダヤと同じような具合に。

学校だつてそうですよ。大学当局と学生なんてものが対立したら、大学なんてものはないわけではない。学校というものは人格的な共同体です。対立ではない。有機体的な一なんです。その有機体的な一を、先生がただ威張つたつてこれはダメです。また、学生が、「俺たちは」と言つてもダメです。もうひとつ別なものを持たなくては。どっちにもある。

どこの世界をとつてもそうなんですよ、政治の世界でも、あるいは経済的ないろいろなことでありまして。要するに、すべての営む主体は人間だから、人間そのものが別な次元に入らなければ。それが新次元の人に——皆さんが、我々が——パウロのこのエペソ書をとおして示されるわけです。ひとつの新しき人について、そこに本当の平和が来るとパウロが言っている。ギリシヤとユダヤの間に平和が来ると。

●あなたがいなくては生きていけません

自分たちはなるほどユダヤ人であつた。律法を律法として非常に尊重してきた。けれども、この律法の義に執っていたのはいかに間違いであつたかということパウロは言つた。だから、

「律法におけるわが義ちりあくたというものを塵芥のごとく思う」

とパウロは言いました。これはピリピ書に書いてある。エペソ、ピリピ、コロサイというのは、切つても切ることのできないパウロの晩年の獄中書簡です。

パウロは律法を乗り越える。キリストは律法の終りとなつた。「律法、律法」と言つていたのが大きな間違いだつたと。パウロは一生懸命につくんだが、どうにもならない壁にぶつかった。ルターもそうです。

「神の前にいかにして自分が義たらんか」



といって苦しんだが、独房でぶっ倒れてしまって、あれをもう少し放っておけば、ルターは死んでしまったんですよ。同僚がドアを蹴破って入ったら、ルターは真っ青になって倒れていたという。それは、いかにして自分が神の前に義であるかということに苦しみ抜いた。

「ああ、この死の体より我を救はんものは誰ぞや」

という、パウロのロマ書7章の告白と同じです。

「汝、キリストなるがゆえにわれ感謝す」

と。もう死に瀕したものを本当に救ったものはあなたですと。

キリストは、どうして律法を全うできたんですか。彼は神の子で、とにかく完全に別といったような、そんな角度からキリストはこの律法を全うしたのではない。「私のように完全になれ」なんて言いはいしない。ところが、キリストは、

「父の全きがごとく全かれ」

と言われたね。あの「全さ」の意味は、私は一番あとでまた言いますが。そのキリストがそうじゃなかったんです、自分は、幼子おさないのたましいです。

「自分は無力です。何もできません。あなたを離れて私はありません」

と。空気を離れて私はありませんと。あなた方は、空気を離れてあります。空気にこうやって身体が包まれている。毛穴を全部塞がれたら、たとえば鼻から呼吸したって死ぬんですよ。それほどまでに空気は私たちに浸透している。鼻から呼吸して、時々刻々、血液は浄化されている。浄化作用をしょっちゅう行なっている。常に我々の肉体の浄化運動を行っている。生命化されているわけです。いわんや我々の魂は常にこの霊化運動をしてなかったらダメなんだよね、霊化作用を。魂が霊化作用を起こしていなくては。ことごとくぶつかっては、魂が霊化作用を起こしていくような人にならなければ。

キリストはこのように、

「あなたがいなくては私はもう死んでしまいます」

と。キリストなくても生きているような顔しているクリスチャンがたくさんいるわけだ。口では「キリスト」、目では「十字架」なんていつているけれどもね。なんか魂が窒息してしまう。このキリストが無かったら、本当の自由さというものがなくなってしまうから。

新しき次元の人というのは、キリストのこの霊を本当に生命として、

「キリストの霊がわが血であり、わが肉である」

と。霊血霊肉の人にさせられていく。

● 律法は隠れたる福音

神の律法というのは、なるほど「モーセの十誡」というのがあるけれども、あれで言い尽くされているわけではない。あれは立派にかなりつかんではいますけれども。イエス・キリストの「山上の垂訓」は十誡以上の言葉です。山上の垂訓はモーセの十誡をはるかに



超えた言葉と言っている。

まだ旧約の律法は、「なかれ」という言葉が非常に多い。あれは実は、

「殺すなかれ」

ではなくて、

「汝、殺さない。汝は殺人しない」

という、律法の根本精神は断言である。

「汝は殺人しない。私がお前の神だから、汝は殺人はしない」

と――本当にそれを受けとったのはキリストだけです――だから、殺人するなよと。人間はサタンにすぐ足をすくわれるからね。

「だから、殺人はするなよ」

との、禁止にもなる、また戒めにもなるけれども。本来は、信じかかっている。

親が子どもを信じないで、親子の関係が成り立ちますか。子が親を信じないで、親子の関係が成り立ちますか。友人関係が本当にお互いを信頼しないで、本当の友人関係が成り立ちますか。「あいつがこんなことを言うだろうか。ああするだろうか」なんていうことをいつも考えていたら。「たとえ私が間違っても、あれは私をかばってくれる」と、そこが本当の友情関係ではないですか。相手をどん底から信じるということが相手を救うことなんです。「こんなにも私を信じてくれたか、私は悪かった」と。

「律法の根本精神は福音である。律法は隠れたる福音である」

と、私はいつか言った。律法を律法とするから、律法がダメなので、この隠れた福音を露あらわな福音としたのがキリストの福音である。

だから、天地を貫いて神の靈法は明かである。法則に本当のつとに則ることが自由自在であるということなんです。天衣無縫。「ああ自然はいいなあ」という。自然は自然法則の中に動いている。ところが、人間がそこを何かつくつて、「なかなかよさそうだ」なんてやつたつて、どこか人工的なゆがみがあるよな、造りものには。造られたものでなくて、自ずから発おのしたものです、すべて。自ずから発したというのは、そういった自然天然の法則です。

私たちの人間界がそのような、魂が本当に靈的法則でもって自由に動いて、信と愛とが、信、愛、一如の世界が展開していったら、もうなんと素晴らしいだろう。そういうような信愛一如のような靈的な次元、それがこの新次元の人である。これは力を持っているんですよ。この靈はどんなこの世の力も、これを屈することができない力を持っている。

「神の国は言葉にあらず、力にあり」

とパウロが言ったその力とは、神の靈的生命の世界のことを言っている。この神の靈的生命を本当に宿す人です。



●新次元の人

もういいです、世界がどう引っくり返つても。この法則をどんなに現実が受けとらなかろうが、それに敢然としてこれを成就していく。神の国を建てていこうという意欲に燃えて進んでいく人。どんなに逆らわれても、絶対に屈しない人。これは神の国を本当に建てるのが万人救済の道と信じているからです。

どうぞ、皆さんは、もう何もいらん。

「有れども無きがごとし。無けれども有るがごとし」

という、本当に自在な、何ものにもとらわれない。とらわれているのはただこのキリストの活ける霊である。このキリストの活ける霊、これにだけ本当にとらわれて生きているものは、これは新次元の人です。もはやただキリスト者なんていう言葉では表せないから、私はこう言うんです。

もうひとつ、パウロはここへ出てしまった。ここへ出たから、パウロはいわゆるギリシアも、いわゆるユダヤも、打ってこれの一つに、この二つのものを一つにして、本当の平和を来させたものが、この「十字架・復活・聖霊」のキリストである。

一部のユダヤ人は本当にパウロと共に回心した。使徒たちはみなそうです。ヨハネもペテロも。ペテロも始めのペテロはダメだよ。ところが、使徒行伝のペテロは、このキリストにある

「我を視よ」

のペテロになってしまった。

「我とキリストは一つなり」

のペテロになってしまった。いくらペテロがガラタだつて、もう凄いペテロです。パウロとペテロとヨハネとヤコブとみな同質のものです。人間の賜物やなにかはいろいろちがう。決して神さまは典型的に人をつくらないからね。

あなた方はみんなそれぞれで、天下一品です、ひとりびとりが。しかしながら、このキリストの霊を持った新次元の人として皆さんが一つである。ここに本当に平和がある。平和はまず、

「神―キリスト―我」

という関係が本当に立つこと。これが本当の平安という。私は手紙に時々、この「平安」というのを頭を書く。平安があなたにありますようにと。また、私たちの関係は平安でありますと。「シャーローム」という。このシャーロームはまずこの縦の関係が本当に立たなければ。人間相互の横の関係をどんなに握手したつてダメだよ。

●本当の勝利

これが、



新しき人に造りて平和をなし、¹⁶十字架によりて怨みを滅ぼし、ということ。ギリシアとヘブライの怨み。ソ連と中共とアメリカ、何とかかんとかの怨み、お互いの憎しみ、疑い、そんなものを滅ぼすものはもうひとつ、為政者が本当に平伏するか、ほとんど不可能です。

霊的波動でも送ってやるか。あなた方の祈りが作用したら大したものだよ。東洋の方からなにか波動がくるな、なんて。心霊学の方でも念力というやつがある。凄いものを持っているらしいけれども。しかし、そんな心霊学の研究は要らんよ。我々はこのキリストの祈りの世界では、キリストにあつては、その時どんなに現実が実現しなろうが、その祈りはいつかなんらかの形で遂げられていく。審判となって現れるか、知らんですよ。とにかく、神さまは私たちの、この神の本願、誓願に即したところの悲願は必ず受けとつてくださる。

「よし、お前たちの祈りは受けとつた。私がいいようにしてやるぞ」

と。全部これはキリストに、神さまに任しておけばいい。自分の思うとおりに向ならなくてもいい。いや、我々の願い以上のことが神さまはしてらっしゃるから。そこが本当に我々の祈りは聞かれているということなんです。我々が本当に自分を投げ捨てたところの祈りは必ず聞かれている。「聞かれるだろうか？」ではない。御霊に即した祈りは必ず聞かれる。そして、

「御霊の執り成しをもつてどうぞお受けとりください」

と、平伏していかなくてはいいかん。

そして、この新次元の人となったら、どんなに敗北のようにみえても、絶対に敗北ではありませんぞ。失望はないですよ。勝利は、ローレル(月桂樹)の葉は我々のものである。そういう本当の勝利。神の国は成る。どん底からの救いを人にもたらすべきところの悲願。これのどこがわるいかと。「教会の、無教会の」と品定めなんかしているのではない。私はもうそんなところは超越してしまつた。どうでもいいですよ。皆さんも、この福音を知らないひとがたくさんいるんだから、そういう新鮮な魂に呼び掛けてください。もう出来上がったものはないんだ。ゲートも、

「出来上がったものはダメだ。常に展開してやまないものでなくては」と言っている。

●「一」

そこで、

¹⁶十字架によりて怨^{うらみ}を滅し、また之によりて二つのものを一つの体となして神^{やわら}と和がしめん為なり。¹⁷かつ来りて、遠かりし汝等にも平和を宣べ、近きものにも平和を宣べ給えり。¹⁸そはキリストによりて我ら二つのもの一つ御



霊にありて父に近づくことを得たればなり。

と、パウロが本当に喜んで言っている。大方のユダヤ人はダメだけれども、我らはそうだったと。もうギリシア人もユダヤ人もない。みな一つだと。もう奴隷も自主もない。ギリシアもヘブライもない。アッシリヤもエジプトもない。みんな一つになるという。

エペソ書というのは――エペソ書に限らないけれども――パウロは三段論法でものを言わない。グーッと波状的に、あるいは螺旋形に言葉が動いている。一つ御霊でもって全く一つにされたことを平安とか平和とか言う。言葉はどうでもいい。もう、一つになる。

私は黒板に、「一」という字を書く。あなた方がこの「一」を見て、魂がブルブルと震えなければダメだよ。我らはこのキリストで一つだ。私のこの中に燃えているこの悲願に、あなた方がなにはさておき、電流が通ずるよりも霊流が通ずるように、ウワツと一つになる。これですよ。そうしたら、それで乗り切ったら、もう相対的なことは問題にならない。

それでなければ、「新次元の人」なんて言えないですよ。新次元の人というのは、相対的な世界を超えた、本当に何ものもこれを屈することのできない驚くべき生命力を持ったところの事態です。これだけが本当に世を救うところの原始力です。どんなに人数は少なくてもいいよ。たとえ一人になってもやる。

そういうような一人びとりが、魂の合っているこういう集会は、また来年もまたここでやりましょう。そうでなかったら、よししましょう。これは冗談じゃない。本当ですよ。もう私たちは冗談を言っている世界ではないんだから。

● 神の家族

19 されば汝等¹⁹はもはや旅人^{やどりびと}また寄寓人^{きよぎよじん}にあらず、聖徒^{せいと}と同じ国人^{くにびと}また神の家族^{かぞえ}なり。

「聖徒」というヘブライ語は「ハッシデイーム」という。即ち、本当に預言者たちはエホバの霊に、ヤーヴェエーの霊に取りつかれた人たちです。そして立ち上がった。

「いやいや、それは御免です」

と言って退いたのがある。エレミヤが、「私はまだ若いから」なんて。

「いや、若いなんて言うな。お前を立てて、万国の柱とする」

と。日蓮に向って仏の世界が示されたように。エレミヤは非常にハートの優しい人なんだ。涙の人なんだ。それでエレミヤは立たしめられてしまった。

そういう聖徒と預言者たちと同じ国人、同国人、天国人となつて、私たちは神の家族になつてしまった。

コリント前書3章16節、

「¹⁶ 汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御霊なんじらの中に住み給うを。

¹⁷ 人もし神の宮を毀^{こぼ}たば神かれを毀^{こぼ}ち給わん。それ神の宮は聖なり、汝らも



亦かくの如し。」(コリント前3・16、17)

とある。「生きた神の宮である」という。それから、もうひとつ前の方にも「建物」と書いてある。9節、

「⁹我らは神と共に働く者なり。汝らは神の^{はたけ}なり、また神の^{たてもの}建築物なり。」(コリント前3・9)

宮だとか、家だとか、家族だとか、建物だとか、同じことをいろんな言葉で言っているだけのなしです。

私たちが新次元の人になりましたならば、もう我々はみんな霊的家族なんです。親子、兄弟、姉妹です。キリストが、

「これ汝の母なり、これ汝の子なり」

と、ヨハネとマリヤに言った。我々は本当に霊的な家族です。

それであるのに、ご飯を食べるときに、似たようなものが集まって食べていたらダメですよ。そんなのはまだ肉的なんだ。誰とであろうとも、隣に坐って食べる。お昼はみんなそうしなければダメだ。朝と同じにしてしまったら、大喝するから。将来結婚するなんていつて、横に坐ったらダメだよ、そんなのは(笑)。

そういうように本当に霊的家族、兄弟姉妹としてやってくださいよ。どうしても、そういう人間的なものを――あるときは人間的で結構ですけれども――それを本当に突き抜けたものを持つてなければいかん。もう自分の生命力がダメになるから、それでなくては。

●新人類

私たちは新次元の人、新次元の新人類である。パウロ、預言者、使徒たちの霊生を直ちに継いでいるところのものである。「プロテスタントの、カトリックの」なんて、そんなことを言っているのではない。歴史の何千年であろうとも、そんなものをグーツと現実化して、また未来も現実化して、未来も過去も本当に現実化して、生きるようなやつ。これが本当に永遠を持つている人なんです。この永遠を持つているところの、天地一如にしているところの人間、これが新次元の人。そのようなもの凄い、何ものもこれを屈することのできない生命力。そういうような人に皆さんがならなければ、20世紀のこれからあと30年を突破するわけにいかん。

もう我々は、この聖書の呻き叫んでいるところの現実^{じつ}に直結している人たちである。聖書解釈や、意味がどうだなんて、そんなことをこじくり回しているのではないんだと。皆さんは直々に――これは何という字かわからなくなつていいよ――じつと見ているうちに、その字の背後から迫ってくるところの根源の言葉に触れるから。「まだ私は大学に行つてませんから」なんて、何が大学だ。もはや、小学校から大学、どうのこうのという問題じゃない。そういうったような人が本当にそれぞれのところにおいて、自分の相対的ないろいろな問題



や事柄を本当に支配し処理していくことのできる人なんです。

この次元にきていると、それがアメリカであろうが、中共であろうが、何でも誰とでも本当に握手ができる人になる。^{きょうきん}胸襟を開いて。そういう日本人になったら、そのときは本当に武器はいらん。ただ「武器はいらん。平和、平和」なんて言ったってそれはダメですよ。本当に日本が軍備なしでいこうというなら、それだけの新次元の人に日本人がならなければ、世界に本当に自分を武器なしでもつて立てるわけにいかん。「それではまだ成らないからおおいに武器を造ろう」という、そういう結論ではないけれども。

惜しいね、日本人というのは、いい民なんだけれども。どうして、そういう絶対的なものに^{あこが}憧れないかと思つてね。何をやったって器用なんだよ。経済面だって凄いし、自動車なんてアメリカについて造つてみたり。何をやったって、船を造らせたら、世界一の船を造つたり。不思議な民だと思つているでしょうよ。けれども、ひとつ一番大事な不思議さを持たなくては。

藤井武先生が、最後に日本がこの福音の世界で霊的な――霊的とは言わなかったな――直観の世界で、何となく憧れていたところの世界を、私たちははつきりつかんでしまっているんだから。この聖霊です。内村先生、藤井先生が方向づけていたところのことをもつと――私は内村・藤井なんていう立派な偉い先生とはちがい、こんなちっぽけな野郎だけれども、この霊的な使徒的な信仰の次元なら、内村鑑三といえども、藤井武といえども、私は負けません――その先をいただいております。これは誰が何と言おうとも、私はこれを告白しなかったならば、このキリストを否むことになる。

私の「曠野の愛」誌26号を読んだときに、手島郁郎さんが手紙をくれた。

「あなたは内村と藤井を完全に乗り越えた」

と言つて、彼は喜んでくれた。やっぱり、私をわかるのはあの手島だったんです。とにかく、私はどうでもいい。私は何ものでもない。ちつとも偉くない。私は一番ダメな男です。絶対に私のまねなんかしないでください。ただ、私の土だかゴミだかの中に、塵芥の如きやつの中に光っているものがある。これだけは仕方がない。これ^{いかに}如何とも仕方がないというだけのなしです。

●直結のキリスト者

それで、

²⁰ 汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、パウロはちゃんと saying しているわ。

キリスト・イエス自らその^{すみ}隅の^{おやし}首石たり。

ペテロはペテロ前書2章のところで、

「キリストは活ける石である」



リビング・ストーン。「キリストは活ける石である。活石である」とペテロが言いました。ペテロ自身が「巖、石」だなんてキリストに言われたけれども。私たちは、預言者・使徒たちの霊統を継いでいるところの直結のキリスト者です。ええ、皆さんは。本当ですよ。

信州の方々は、浅間山の火山の懷に住んでいて燃えなかったら、浅間山が嘆くよ。こんなに温泉を出しているのに、何しているかと。私はもし東京を去るようなことがあったら、こういう山の所に行きたいね。あなた方はそこに居るのだから、羨ましいはなしだよ。どうぞ、この信州の人々を――信州人というのはいくつもあるが、パリサイ的なところがあるからね――これをだんだん溶かしてくださいよ、熱でもって。熱がなかったらダメですよ、溶かすわけにいかん。もの凄い高度な霊的な熱をもって溶かしてください。

あなた方は一人ひとり、来年ここに来るまでに一人、本当に伝道してください。そうしたら倍になる。その覚悟で来てくださいよ。この生きたものは伝えざるを得ないんです。

「われ福音を宣べ伝えずば災いなるかな」

とパウロが言った。私は家族の伝道は落第生です。まあ、キリストもちよつと始め手こずったんだよね、ナザレには。一番親しいやつから、

「何だ、この頃ちよつと変わったことを言ったりしたりするがどこから得てきたか」なんて言われて、バカにされたか、なにかされたかしらん。

「預言者は郷里にいられず」

と言って、キリストはナザレを出てガリラヤへ行ってしまった。

しかし、「私は聖徒を一人も救えなかったから、遠慮しよう」なんて、そんな遠慮はいらん。遠慮はいらんけれども、非常に祈りかつまた求めたにもかかわらず、ついに一人も得なかった。ああいいです、それで。しかし、それをやらないで、ノホホンとして来たってダメだよ。そういうことで行きましょう。

●一即多・多即一

だから、大家族です。

21 おのおのの建造物、^{たてもの}かれに在りて建て合わせられ、いや増しに聖なる宮、主のうちに成るなり。22 汝等もキリストに在りて共に建てられ、御霊によりて神の御住^{みすまい}となるなり。

なんと、私たちに暖かい、東洋的な言葉でしょうか。もともと福音は東洋的なものですが、そういった「一つ」ということです。

マルチン・ルターのちょうど百年あとに――マルチン・ルターは1483年から1546年という人なんだ――ところが、1583年から1645年のひと、グロチウスというひとですが、これはオランダの国際法学者です。このグロチウスというのは、

「全世界はただ一つの法律を持つ共同体となり得るのだ」



ということをやった凄いやつです。

「法というものは本来そういうものだ。一つの法が万民を支配するはずのものだ」

と。これは国際法の元祖でしょ。法の世界でもそれだけの理念を持っていたオランダの法学者がいた。いわんや、私たちキリストの靈法においては本当に、カトリックもプロテスタントも、教会も無教会も幕屋もありはしない。もう本当にこれが一つ。在り方はみなそれぞれでいい。カトリックはカトリック、無教会は無教会で、何だつていい。けれども、そこに本当にキリストの靈が働いて、本当に靈法が動いているか。これだけが問題です。そこにおいて初めて靈的次元の人となれば、一つとならざるをえない。もの凄い多である。もの凄い多であつて一つである。一即多という。一、即多・多即一という、この事態。そうしたら、もう相対的なことでもつて、どうのこうのなんて言うのはバカらしくなる。

そういった靈的なことになる。さっきの木喰和尚がやつぱり言っているんだよね。

「木喰の昔と今のわが心並べてみれば月とすっぽん」

という。あなた方が本当に、かつてとこの今とを比較してみると、なんと私は変わったろうと。あいかわらずダメはダメなんだが、なんと変わったろうと。これなんだ。これが、「わが心並べてみれば月とすっぽん」、月とすっぽんのように違ってしまつたと。皆さんはそうなつたら、この木喰和尚と同じ告白ができたならば、この新次元の人になつたということです。

次元的な相違ですよ。段階的な相違ではダメです、単なる段階的な相違では。質的な次元的な相違とならなければ。これはなるんです。キリストの靈は次元がちがうんだから。キリストの靈でなければダメですよ。どんなに「信仰が深まりました」なんて、そんなものは当てにするわけにいかない。そんなものはかえつてパリサイになるくらいなものです。目玉を見ているとわかる。目の輝きが変わつてくるか、どんよりとしているか(笑)。ご飯を食べたあとは少しどんよりしたりする。どうぞ、魂のお腹が本当に満ちて、満ち満ちた人になつていなくては。

●聖霊の人に成長

それで、今日、第二回のところは少し早めでありませうけれども、終りといいたしましょう。要するに、この1章、2章においては、我々、個が、この個的存在が徹底的に変わることです。内的に根源的な現実において質的に、次元的に相違をきたすこと。これがもう先決問題です。

これは今日一番先に歌つた「十字架の血に」というところから始まることは言うまでもない。昨日、申し上げたとおり、常にいろんなことにぶつかつては——いいですか、ただ観念的に「十字架」なんて言つたつてダメですよ——ことごとくにぶつかつては、躓いたり転んだりして見ては、この十字架のキリストの下に本当に平伏す。十字架されている自分というものを本当に見る。そこでその十字架され方が強まっていく、深まっていく。と同時に、必ず靈的に聖霊の次元の人にいいよ深められる。これでいいというところはない。



この新次元の人は成長してやまずですよ。新次元の人として成長してやまず。「私はもう新次元の人になったから、お終い」なんて、冗談じゃない。そんなのはまた落っこちてしまう。常に展開してやまずということ。

それは自分の力で展開するのではない。ちゃんともうの凄い磁極があるんだから。霊的磁極が引っぱっているんだ、磁石(磁針)を。私たちは磁鉄だからね。霊極を指す。霊極を指さざるを得ない。キリストに引きつけられる。キリストは引きつける存在である。これがもうたまらなくなってきたら、本当です。まだ「キリストを信ずる」なんていつて頭でやっているうちは絶対にダメ。

それは福音書に帰りなさい、常に。そして、福音書でキリストにぶつかりなさい。そうしたら、キリストにぶつ倒されながら引きつけられていくから。キリストは私たちをぶつ倒し、降参させながら、どしどし凄くしてくださる。ただ頭をなせているんじゃない。

どうぞ、皆さん、生きのいいクリスチャンになつてくださいよ。もういやだよ、いい加減なのはね。そうしたらば、どういう現実に出遭つても、何だかしらんが、そいつが磁石みたいな人でね、今度は、周りの人たちを磁鉄みたいに引きつけるような人になるから。会社に行こうが、学校に行こうが、どこに行こうが、「何かあの人はずがうな」と。そして、困ったことや悲しいことにでつくわしたら、

「大丈夫です。心配いりません」

というわけで、そこが伝道になるんです。伝道とは具体的なことを通して行く。決してただやたらにお説教したつて絶対にダメです。かえつて反発されるくらいなものです。

詩篇42篇に、

「ああ神よ、しかの溪川たにがわをしたい喘ぐあえがごとく、わが靈魂たましひもなんじをしたいあえぐなり。²わがたましひは渴けるごとくに神をしたう。何れのときにか

我ゆきて神のみまえにいでん。」(詩篇42・1〜2)

と。「神」の代りに「キリスト」と読みなさい。私たちはキリストを慕うこと、鹿が谷川の水を慕うがごとくに慕いあえぐ。

喉が渴いたときに、真清水を飲むくらいさわやかなことはないね。お腹がすいたときにご飯を食べるでしょ、喉が渴いたときには水。アイスクリームはダメだよ。ビールはちよつといいけれども。それは何といったつて水ですよ。本当に渴いたら、これは水です。何といつても人間は一番単純なものを要する。どうですか、ここの木々は何か肥料をやってますか。何もやってない。雨水だけです。雨水だけを吸つては、こうやって青々と繁っている。こういう名もなき灌木や雑草を見て、ここに本当に天的な生命力がある。我々はこのキリストという無色透明の霊的な真清水、聖霊を飲んで、他に何が要るかというわけです。この山の木と我とは一つなりという。そういうようなのが、私たちの霊的新人なんです。お茶もいいよ。日本人はお茶が好きだから。けれども、本当に渴いたときには水です。

